

## 平成20年度第2回高津区区民会議（摘録）

日 時 平成20年11月6日（木） 午後6時00分～午後8時30分

場 所 高津区役所5階第1・2会議室

### 1 出席者

(1) 委員 伊中委員、大内委員、長村委員、木村委員、小島委員、金委員、佐藤委員、  
島崎委員、宗田委員、瀧村委員、富田委員、浪瀬委員、長谷川委員  
平澤委員、横山委員、吉崎委員、吉田委員、若林委員

(2) 参与 石田参与、猪股参与、大島参与、岡村参与、粕谷参与、後藤参与、  
堀添参与

(3) 事務局 区長、副区長、企画課長、地域振興課長、区民サービス部長、橘出張所長、  
保健福祉センター副所長、こども支援室長、建設センター所長、地域振興  
課主幹、市民税課長

(4) 傍聴者数 4名

### 2 次第

(1) 開会

(2) 議事

企画運営会議における審議状況について

第2期区民会議の調査審議課題について

環境まちづくりについて

コミュニティと地域防災について

その他

(3) 閉会

### 1 開会

吉崎委員長及び山崎区長あいさつ

### 2 議事

(1) 企画運営会議における審議状況について

資料1により小島副委員長から説明

(2) 第2期区民会議の調査審議課題について

資料2、資料3により事務局から説明

議長 第2期区民会議の調査審議課題について、これまで既に、現地調査、学習会を開催

し、調査活動を進めているが、本日の会議で正式な決定をするので、意見を伺いたい。  
委員 企画運営会議では、「環境まちづくり」と「コミュニティと地域防災」でコンセンサスがとれている。そうではないという意見があれば聞いてみたい。

委員 2つに分けることは結構である。

「コミュニティと地域防災」は2つの課題を1つにしているが、ある部分ではコミュニティと地域防災がバッティングしている。その部分をどういうふうに整理するのか。議論の進め方が理解できない。企画運営会議ではどういうふうに議論されたのか。それはこの場でお任せであれば、皆さん方のいろいろな議論を出していただきたい。

委員 今出た意見はもっともだと思う。企画運営会議でもいろいろな議論があった。コミュニティは、地域の人と人のつながりをどう豊かにしていくかがカギになってくる。コミュニティと地域防災という2つのテーマをくっつけた形であるが、その中で自由な意見を交換していけばいいのではないかというのが、企画運営会議でのコンセンサスではなかったかと思う。

議長 「環境まちづくり」、「コミュニティと地域防災」を課題として取り上げることでよいか。

(一同了承)

### (3) 環境まちづくりについて

資料6、資料7、資料8等により事務局から説明

議長 「環境まちづくり」については、第1期から審議されているエコエネライフコンクールの実施、緑のまちづくりファンドの創設の2点に加え、多摩川バーベキュー対策の推進の3点があるが、まず、エコエネライフコンクールについて意見を伺いたい。

委員 エコエネライフコンクールの実施は、区民会議が問題提起をして、具体的な検討は「エコシティたかつ」推進会議がする形になっている。「エコシティたかつ」推進会議はそれを進めていくコンセンサスになっているのか。

委員 「エコシティたかつ」推進会議では、まだ具体的な話は十分詰めていない。ただ、「エコシティたかつ」推進会議では、学習会を含めて、地球温暖化問題を大きな意味で、自分たちの生活の中で取り組んでいく視点をちゃんと持っていこうということと同時に、異常気象問題に緊急に対応していくという2つの視点について検討がある。エコエネは学校を含めて家庭に広く伝えていく活動が必要である。そのためには、区民会議の中で積極的に取り上げていただき、高津区全体として省エネエコに取り組んでいく姿勢を打ち出していきたいと思う。

議長 コンクールをやろうということは決めたが、中身の具体的なものは、きょうの皆さんの意見で取り入れられるものはできるだけ取り入れる形になると思う。意見がいっぱい出た場合は、企画運営会議の中で整理して決めたらいい。この間の企画運営会議では

そのような話になった。

コンクールといっても幅が広い。具体的な意見があればどんどん出していただきたい。

委員 コンクールとして取り上げるには何が一番いいのか。各家庭で簡単にできるような対象を提案しないと、なかなかできないのではないのか。簡単にできてCO<sub>2</sub>の削減に非常に役立つコンクールがあれば、一番いいのかと思っている。

コンクールではないが、マイバッグを奨励するのも1つの案ではないか。簡単にできるようなことでないと長続きはしない。実践可能であれば、我が家でも実施したい。

議長 家庭でできるもの、企業でできるもの、地域でできるもの、いろいろあると思う。

みんなに実施してもらおう大事なことであるが、どういう形でやるかになる。

委員 コンクールの規模もあると思う。部門別のようにして、多面的なとらえ方でコンクールをやるのはいかがか。

委員 かかわる人によって取り組みは違う。子どもと大人ができる取り組みも違う。コンクールを行う場合、皆さんにそういった意識を高めてもらうのが第一になると思う。そういう取組は、小学校だけとか1つの団体だけとかで今までやってきている。そういうものをもっと広めて、高津区全区的にできればいいのではないかとと思っている。部門別に分けてやるのもいい案だと思う。

委員 コンクールで表彰することが普及啓発につながる。去年、今年とやられているストップ温暖化展、一村一品のような取り組みの高津区版ができればいいと思った。

委員 今年はゴーヤーをやったが、新聞にも出たり、高津区の食堂でも出したり、そういうことがあるので、1年だけで終わりにしないで続けてもいいのではないかとと思う。

議長 区民会議で取組もうということまで決めたが、具体的に取組むのは何かということで、ゴーヤーということで始まった。

委員 コンクールというのは簡単であるが、実際にやるとなれば、どこで受け付けをして、どこの団体が参加するかをやらなければコンクールにならない。昨年やったゴーヤーをもう少し広めて、小さな面から大きく持っていく形のほうがやりやすいのではないかと感じている。コンクールだと、余りにも大き過ぎてしまって、どこからどういうふうに手をつけていいかわからない。

議長 ゴーヤーをやめるとは決まっていない。

事務局 緑のカーテン事業自体は継続する方向で考えているし、「エコシティたかつ」推進会議などでも続けてやってほしいという意見をいただいている。議論のポイントは、緑のカーテンコンテストとエコエナライフコンクールの相乗的なつながり方だと思う。

委員 一区民としてゴーヤーのカーテンに挑戦したが、参加賞をいただいた。種をとって、それを広げていく取り組みも1つの大きな柱かと思っている。そういった意味で、緑のカーテンは、継続して拡大していく方向で、積極的に取り組んでいくことを確認していただければと思う。

今議論になっているエコエネコンクールは実際どういうふうによつたらいいのかは、結構大変かなという気もした。実際にやり方はいろいろ工夫する必要があると思った。緑のカーテンの発表大会のようなものの中で、いろいろ部門別だとか、多様な取組をみんなて工夫し合い、それを学び合うような場にできれば、インパクトがあるのではないかと感じた。

委員 昨年来「たかつエコエネライフコンクール」についてというのでいろいろ言わせていただいているが、こういうエコエネライフコンクールは小さな市民団体がやっている。いろいろなコンクール手法は実際あるし、子どもたちが参加しやすい時期をねらって、夏休みの宿題や自由研究にもなるような取組は、学校でもいろいろな団体でもやっている。実施するとすれば、地球温暖化防止に向けたいろいろな効果があるというところまで、区民に広く広報しながら進めるのがまず必要ではないか。

ここで議論をどんどん進めていても、なかなかそういう手法にまで到達できないので、少人数でそうしたコンクールをどう進めるか、どうほかの団体と連携するか。団体なり、個人なり、家庭なりが出してくれた省エネの提案をコンクールするのはおもしろいと思っている。おもしろい省エネライフを提案してくれたところに賞を上げる。学校全体で珍しい取組をしたというのがあれば、評価する対象ではないか。そういうノミネートの仕方をできるように区民会議が仕掛けをどうつくっていけるか。いいことがあるならば、区民全体に広げられるようなコンクールであればと思っている。

委員 コンクールをいろんな部門からやったほうがいいと思う。まず家庭で取り組んでいる事例、それから企業は、費用の面からとかISOの面からいろいろなことをやっているの、入っていただく。団体としては、学校はやっていると思うので入っていただく。区役所も入っていただいて、効果の数量的なデータを出せるフォーマットをつかって、環境局からもアドバイスももらってよつたらいいのではないか。各分野を含めて大きくやったほうがいいと思う。

委員 今の意見はもっともだと思うが、高津区役所は、夏場クーラーが消されてしまって、会議に来ると暑くてしょうがない。中で働いている職員の人たちも汗かきかきでは能率も上がらないと思う。これから冬場になって寒くてふるふるしながら会議をやらされるのかと思うと、容易ではない面がある。物にはいろいろ程度がある。今の意見に水を差すわけではないが、確かにできることは実施して、よりCO<sub>2</sub>の削減をしなければいけない。

委員 エコエネの問題は各機関だとかいろいろなところで今取り組んでやっていると思うが、高津区は、それだけいっぱいいろいろなことができるかという、非常に疑問に思っている。1期から続いているゴーヤーの緑のカーテンはすばらしいと思っている。ゴーヤーのカーテンコンクールはかなり新聞でも取り上げられ、絞った中でのものだったので、かなりアピールがあったのではないか。ゴーヤーのランチも非常にアピールはあ

ったのではないかと思う。いま高津ではゴーヤーに取り組んでいることをもっとアピールしていてもいいのではないか。余り手を広げても今度は影が薄くなってしまう。昨年に引き続いてのゴーヤーをもっとアピールして、もう少し取り組んだほうがよろしいという意見である。

議長 ゴーヤーは引き続き取り組んでいくことにして、エコエネライフコンクールを実施することでよいか。

(一同了承)

委員 私どもの町会が全面的にかかわっているもので、お正月にもちつき大会をやる。マイはしと食器一そろえ、それぞれ家族でみんな持って参加している。こういう事例を企画運営会議の検討材料の中に入れることをお願いしたい。

いろいろ議論を聞いていて、自分の町会で何かできることはないかということをつくづく今思った。

委員 この後、企画運営会議の議論でまとめていいと思っている。昨年度、川崎市ごみ減量市民会議のキャンペーンの一環として、買い物袋を持参する運動を市と業者と市民が協定を結んで取り組むことをやった。

もう1つ、ごみの減量についての取組を公募して、その発表大会を教育会館でやった。川崎区の小学校を含めて8つぐらいの団体から発表していただいた。マイバッグをどんなふうに取り組んでいるか。いろいろな団体が既にやっているの、区民会議だけでやるのではなくて、いろいろな団体と連携しながら進めていくこともここで確認していただければと思う。

議長 区民会議だけがやっても何もできるわけではない。同じようなことをやっている団体や企業に積極的にかかわっていく、あるいはこちらでも協力していく姿勢は大事だと思う。

緑のまちづくりファンドと多摩川バーベキュー対策について意見があるか。多摩川のバーベキューは、河川改修でこれから少しの間できなくなることもあるし、国の対応によってどうなるかという問題もある。国の出方によって取り組んでいったほうがいいのかという気がするが、意見を聞きたい。

委員 多摩川河川敷でのバーベキューは様子を見るしかならうと思う。

緑のまちづくりファンドは、既に何か動きをしていた団体とかあったという話を聞いているが、どなたかご存じか。

委員 いわゆるファンドは、川崎市で緑のファンドを持っている。それとは別に、市民団体がトラスト運動を進めているところは幾つかある。川崎・多摩丘陵の里山を守る会はそうしたトラスト運動をしている。

都市化の進むこの場所ですら、どんなにお金を積んでも土地を買えるものではない。緑地整

備のためのお金として1年で100万円ぐらい集まったが、買いたい、整備したい、緑地保全したい土地はどんどんマンション化していく中で、これ以上お金が集まると、買いたくないのにお金を集めるのは余りにもということで、今は緑地整備のために使おうとしている。

きょうも緑地の調査に歩いてきた。高津区まちづくり協議会で水と緑のプロジェクトを進めているが、この周辺を8か所、斜面緑地カルテに沿って見てきた。8か所のうち2か所が伐採されて、1つは分譲で売り出し、もう1つは、地下1階、地上9階のマンションが建つというお知らせ看板があった。8か所のうち2か所が緑地ではなくなっていくのをつぶさに見てきた。区民が緑地保全に自分たちの浄財を積んででも残すべきところは残す意識を持たないと、ますます目に見えるのが緑ではなく、ほとんどマンションの壁になってしまう。

事業者のやることを批判するつもりは全然ないが、ヒートアイランドや温暖化を防ぐのは、ある程度の住みやすい緑地があることによって守られると思っている。街路樹を植えるにしても、緑を保全するにしても、里山活動をするにしても、資金がないと進まない部分があるので、ぜひこういうファンドは考えてもらいたいと思っている。

委員 緑を我々が幾らやっても、行政が建築許可をおろしたら、焼け石に水、何の役にも立たなかった。その辺の行政との絡みがあると思う。それがファンドとどういうふうにかかわってくるのか。マンションを建てるならば、緑化を何%以上しなさいとか、行政が建築許可を出すときに条件をつけることはできるのかどうか。緑は欲しいが、ここで我々が論じてもどうなのかと感じた。

委員 消えていく緑地をみんなで買うファンドの位置づけではない。川崎市には市民緑地もあるし、街路樹愛好会もあれば、公園管理運営協議会もあれば、そういうところで活動する人々もたくさんいる。市民緑地は、私たちのような草刈りをしたり、ごみを拾ったり、そこで体操をしたりという活動をする者たちがいれば、300平米以下のところを貸してもらえる。あるいは、ミニガーデンの人たちが一生懸命花を植えたり、老人会の方々も道路で清掃作業をして、花を植えたりすることも活動の中に取り入れてくれている。そういういろいろな活動に対しても活動資金なりが潤沢にある状況ではない。

街路樹にしても、ここに1本、木があれば、もうちょっと居心地がいいのになという場所もある。道路わきのポケットパークも草ぼうぼうではなく、何とかする方法はないのかというときに、ちょっとした活動を育てていくような方法をとればいいのではないか。みんなが緑化に対してもうちょっと目を向けるということがファンドの役割ではないか。お金を出すということは、それに目を向けることであって、何の目的なのか、どういう現状なのかを知るチャンスを皆様に持ってもらうことではないかと考えて、このファンドはあったほうがいい。

委員 今の意見に賛成である。緑という大きな問題は、市民には無理で、行政でやるべ

きではないかといいきそうであるが、高津区は、緑をなくしてしまうことは非常にやりにくい区にするとか、地球温暖化に対して人間ができることは緑をふやしていくこととか、なくさないことだと思うので、高津区に暮らしている人々はより緑に関心を深く持つ。緑の保全は、女性、子ども、時間のある人たちで、今一生懸命仕事をしている方々には遠い話のようなところにあるのを、せめて高津区に暮らしている人々はもっと深い関心を持って、なおかつ、活動できる人たちを底支えできるようなファンドになっていくといいと思う。

例えば自力で市民活動をするときに何が必要かという、やはりお金である。万単位ぐらいのお金で十分活動を継続することができるが、それがないがゆえに、活動を中止せざるを得ないグループを幾つも今まで見てきている。そういう方たちを支えるようなファンドになっていけばいいのかと思う。

委員 区民1人100円というアイデアもあるが、高津区内にかかわっている企業は、地球温暖化に大に関係のある方たちである。特にマイナス効果のことを仕事としてやっているようなところからは、積極的に資本を出していただけるような働きかけもしていくと、企業の売りにもなる。そういうようなことをちょっと考えた。

バーベキューのことは、具体的に今すぐできるというのではないと思うが、多摩川のバーベキューの特徴は、都市の中にある歩いていけるバーベキューの場所だと思う。検討していただいた対策会議の構成メンバーを見ると、行政以外で東急電鉄鉄道事業本部が入っているのが非常に珍しい問題解決のメンバーだと思う。この間、少し考える時間ができたと受けとめて、いざ、何か起きたときの知恵を膨らませておく期間として、都内のバーベキュー会場みたいなところを見て歩くのもあっていいのかと思った。

議長 ファンドはお金だけでなく、街路の雑草をとって世話をすると木も元気になる。それも1つの大きなファンドになると思う。

委員 太陽エネルギーによって緑が育ち、それが結果的に省エネに結びついたりしている。

委員の言われている緑は里山を守ることである。高津地域の里山は、下末吉ローム層でできており、雨によって非常に崩れやすいような地質だと思っている。特に緑をなくすことは、土地が崩れたりすることにつながると思う。

これから地域防災の話をするが、その辺のところはすごく大きくかかわってくると考える。我々の命にかかわるということを打ち出すことで、緑のファンドを立ち上げられる。省エネとかという言葉はちょっと疑問符がつく。少し慎重に考えなければいけないところであって、ゴーヤー自体は全く問題ない。太陽エネルギーを利用して、ビルが緑のカーテンに覆われて温度が上がらなくなるので、こんないいことはない。これと考え方は同じだと思う。緑の木をとにかく植えることで、この地域は安全に守られるんだという考え方をすれば、もう少しインパクトのあることになるのではないかと。

委員 アジアのほうへ行くと、葉が広がることで木陰を広げるような街路樹があって、あ

んなに暑いところでも温度をぐっと下げることができている。なぜそれが日本でできないか。暮らしている人々がうちの前に葉っぱを落とすなということがあるから、行政もなるべくすっきりと皆さんに迷惑がかからないように、木陰が余りできないような街路樹を選ぶ傾向にある。葉っぱは落ちるが、大きな木陰を持って、私たちの暮らしを守っているんだみたいなどころまで、市民の意識が変わるようなことを支えるようなファンドになっていくといいと思う。

議長 緑のファンドは、将来的な課題としながら、エコエネライフコンクールを進めていくことでよいか。

(一同了承)

委員 ゴーヤーだけではなくて、ヘチマとか、ヒマワリの垣根をつくるとか、いろいろな方法がある。ゴーヤーだけのコンクールではなく、例えばアサガオだけのコンクールとか、ヘチマだけでやるとか、そういうふうにやればなかなかいいのではないか。

議長 そのことも含めて、企画運営会議の中でもう一度検討させていただく。

#### (4) コミュニティと地域防災について

資料4、資料5、資料9、資料10により事務局から説明。

委員 「地域防災とコミュニティ」としたほうが、コミュニティがしっかりしていないと、地域防災はできないというねらいがわかると思う。コミュニティと地域防災というと、コミュニティと地域防災が並行にあって考えづらい。地域防災とコミュニティというと、地域防災を考えていくに当たって、今のコミュニティでいいのかとなると感ずるので、それを1つ提案させていただく。

議長 今の提案に賛成でしょうか。

(一同了承)

委員 「目指すべき方向性(案)」のところは、コミュニティを活性化させることを目的にしているかのように読めてしまう。コミュニティを活性化させて、何をしたいかという目指すべき方向性の書き方に変えていただいたほうがより伝わりやすくなると思う。

コミュニティを活性化させましようと言われても、余計なお世話だと思ってしまう人も多い。コミュニティが活性化していないと、何で自分にとって不利になるのかということがわかれば、何かあったときに、助け合いのためにコミュニティは必要なんだということに落とし込めていける。この方向性の書き方を変えていただけるとよろしいと思う。

副議長 地域コミュニティをいろいろ充実させていくこと自身は、私たちの住みやすいまちをつくっていくために重要な課題であることは、全員わかっていると思う。町内会、



自治会に入って何のメリットがあるんだと簡単に言うが、メリットは目に見えるものと見えないものがある。近視眼的に目の前を見てしまうような人たちが増えている時代なので、そこをどうするのがどこの町内会、自治会、また住んでいる方たちも一番悩みの種だと思う。そのところは、現状をしっかりと把握できないとできないし、次に持っていく部分のところも討議しながらつくっていかなければならないところで、この議論は大変厳しいところがあると思う。

ただ、意識としては今非常にチャンスだと思う。大きな災害が出たときに、家族を持っている人は、自分がいないときどうしようか、そのときにだれに頼めるのか、親戚縁者はみんな遠いところにいるので、やはり地域の人たちしかないと考える。その意識をうまく引っ張っていけば、ある部分では自分のこととしてとらえられていくと思う。その辺のところはこれからの議論の大事なところだろうと思っている。

委員 「目指すべき方向性」とか「解決すべき課題」とかいろいろ書いてあるが、防災が何かの勉強会に参加したとき、例えば盆踊りが盛大にできる町会、お祭りがにぎやかに盛り上がりできる町会は、一朝有事のときにいろいろな面でのプラスになる。端的に言えば、住民同士の日ごろのつき合いが一番大事になってくるという話があった。基本になるのは向こう三軒両隣、日ごろのつき合いが何よりも一番ではないか。町会に魅力を感じるとか何々をどうだとかいろいろ言っても、日ごろの人間関係がよくなければ、事があったときにはなかなかうまくまい運営ができない。

自分の町会は、住民同士和気あいあいのもとに日ごろ過ごしているが、町会に入って何のメリットがあるのか、何がどうだという前に、日ごろの人間関係が一番ポイントになってくる。それにはどうしたらいいのかが一番の基本になっていく。最終的には、近隣の人たちとの互助の精神が基本になってくると感じている。いろいろ町内会、自治会の活性化、加入促進とかあるが、基本は住民同士のつき合いの密度による。

最近、非常に人間関係が希薄になっている。煩わしくなくていいという人も大分多い。平時のときはいいが、一朝有事のときには大変なことになる。ここもう3年、5年ぐらい過ぎた防犯関係のパトロールも、私の町会は約50人からの仲間がいる。そういうようなこと1つとっても、だんだん輪が広がっていくと思っている。近隣同士、住民同士の触れ合いが基本になって、いいコミュニティができていくのではないかな。

議長 人と人のつき合いが大事である。つき合うのが嫌だという若い人がいっぱいいるが、子どもができればそんなことはない。子どもを町会のきずなにしようという町会もある。

委員 梶が谷駅前に暮らしている。若い方たちは人とかかわりを余り好きではないと思ってしまうが、赤ちゃんのいるお母さんは決してそんなことはない。今の若いお母さんはまずパソコン上で友達になって、実際に顔を合わせて仲よくなっている。彼女たちは育児休業中のキャリアママだったりすると思う。子育てをはじめてみると、地域の中で孤立していることの不安感、もしくは寂しさもあってということだと思う。仕掛

けさえうまくすれば、どんどん交流したがつていると感じている。

委員 自主防災組織が形だけでできている町会はかなり多いと思うが、有事のときに機能するのか甚だ疑問ではないか。まずどのぐらいまで各町会、自治会で自主防災組織が動いているのか、機能しているのかのアンケートが必要ではないか。

避難所の運営会議にしても、橘中学校は何もできていない。この間見ていただいた防災備蓄倉庫も、何があるかだれも知らない。鍵もだれも持っていない。有事のとき、だれが鍵をあけるのかも決まっていない。そんなひどい状態で、学校も心配している。橘中学校の場合には、校庭の外にあるのでそんなに心配ないが、ほとんどの学校が校舎の中で、災害時には鍵を壊して中に入ってしまう。学校の中がめちゃめちゃになってしまうと学校も心配している。その辺がどの辺までできているのか調査アンケートが必要で、それに基づいてどんな形で高津区区民会議としてそれを動かしていくかが必要ではないかと思う。この問題についていかに区民を動かすかが大事ではないか。

議長 自主防災組織が形だけで本当に動いていないということで、今度そういう形での調査をやることは区民会議としてもいいか。組織があるのを知らない人にも自覚してもらう意味でも、各町会を含めて徹底して1回やるか。

委員 要援護者について質問したい。去年12月あたりから3月ごろまでは、町内会連合会の中でその人たちをどう扱うのかについて盛んに議論されていた。3月過ぎたら、面接だけはしておいてくださいということがあって、面接を各町会でやったと思う。さらにこれをどういうふうに持っていくのか。コミュニティはこういう人たちのためにも必要であるが、この人たちが権利だと思っている。その前に行政として、近隣に助けをもらうのだから町会に入りなさいとか暗にほのめかすことをやっていくのかどうか。最近はまだ追加で来たが、全然知らないうちに来て、そのままナシのつぶてということを質問したい。

事務局 平成16年7月に新潟・福井豪雨において、歩行困難等で自ら避難行動をとれない方々が犠牲になったことから、避難支援対策の必要性が示され、こういう制度ができた。あくまでも発災直後の公助は、時間的にも限界があり、適切な対応ができないことは想定される。災害時に要援護者が居住する周辺の住民の方に共助として、避難体制の整備をお願いしているような状況である。制度が始まり、皆様方の支援体制の確立をいろいろお願いしているところで、登録者の数も少しずつふえているような状況である。パンフレット等によって災害時要援護者の方が少しずつ登録できるように広報等をしている状況である。

委員 その姿勢はいいが、地元の負担になることを認識させた上でPRしてほしい。特に顔見知りの人のところでは、要援護者がいれば無視するものではないが、全然話もしたことのないところから突然来ると、はあっと思ってしまう。権利を行使するのではなくて、支援するほうは自分の身を守ってということが第一なので、二の次ですよというこ

とは徹底してほしい。

委員 一理あるかと思うが、要援護者の方との面談のときに、あなたを救助するのは二の次ですという言い方はできない。事があったときはできるだけ速やかに我々で援助なり援護をするから、安心して日々の暮らしに励んでくださいということをおいたが、まず自分の家族が落ちついて、それで行くのが一般的だと思う。

そういうような人がいると、精神的に負担になるという表現をされたが、今の段階では精神的な負担は感じていない。一朝有事のときに、町会の人々と力を合わせて、それなりの避難所に運んであげ、いろいろなできるだけのことをしてあげればよいと思っている。行政から、援助してもらえるのが当たり前のように考えているような思いでは困るとか、そういうようなコメントは要らないと思う。その場所の責任者が会話をし、相手に安心感を与えてやるのが一番の私たちができる仕事だと思っている。

委員 できる限りの援助はするつもりでいるが、行政は郵便で送ってきたままである。

議長 防災の中で一番大事なことなので、これはこれで区民会議からこうしたらもっといいのではないかと意見具申を検討するのはどうか。

委員 わかった。

委員 前回学習会で、地震のことをいろいろ勉強した。今ここに何が起こるのか、どんな危険があるのかを具体的にそれぞれの人がイメージできることがないと、地域防災はだれかやってくれるんだろうみたいなことにもなりかねない。

学習会で言ったことをもう1度確認したいが、駿河トラフで起こる東海地震は、この近辺ではせいぜい震度5程度なので、そのことはいい。関東大震災は、200年周期であると学問的に言われているから、まだあと100年以上ある。となると、直下型を考えればいい。青葉台の断層の話を見せていただいたのは、青葉台に断層があって、推定断層がこっちのほうに延びていることを言っただけである。まだ学問的に調査されているわけでも何でもなし。大きな地震が起こった後に、そこに断層があったというのが普通ある話で、起こったらそこにあったというほうがはるかに多いので、そのことを申し上げた。

実際にそういうことが起こったら山が崩れ、川沿いのところに液状化現象が起こる。それは関東大震災で実際起こっている。震度6強が来たら、具体的にこうなるとイメージして、それで自主防災組織みたいなものを私たちはつくっていかねばいけない。そういうふうにイメージして行って、皆さんの中にこれはやっていかねばいけないという順番をつけたほうがいいと思った。

議長 どの程度の地震が来るのかははっきりわかっていれば結構だが、種類、場所、振幅もみんな違うので大変難しい。新潟の原発みたいに何も無いと思っても、原発の下に活断層があったと出てくる。地層は複雑だと言われている。

委員 アンケートの実施が1つ決まったように聞いたが、何のためのアンケートかということがないと、やみくもにアンケートをとれない。そうした地震があったときに、どう

いう支援メニューが用意できるのか、できないのか。何が大事なのかというアンケートと支援メニューは一体なものだと思う。アンケートをするならば、アンケートと支援メニュー、町会加入を進める3セットでいかないと、コミュニティと地域防災は考えてこない。何を実施するか、どういうふうを実施するかぐらいは決めておいたほうがいいのではないか。

議長 アンケートについては、企画運営会議の中でももう少し具体的に検討するが、そういうことでよいか。

委員 結構である。

議長 「目指すべき方向性(案)」と「解決すべき課題(案)」については、案となっていますが、案をとって承認いただけるか。

(一同了承)

議長 次回12月の会議で本格的に審議をするが、課題解決策のアイデアについて皆様のいろいろな意見を伺いたい。

(5) その他

資料11等により事務局から説明。

11月20日に企画運営会議、12月1日に第3回区民会議を開催することを了承。

議長 支所・出張所の再編で高津区はどうなるのか。

事務局 橋出張所では、届け出は区役所に一元化、諸証明の発行は行う。地域振興関係の業務は引き続き行う。市民活動支援の活動は、区役所で現在行っている部分は出張所・支所のほうでも新たに行う。業務の内容を整理して区民サービスの向上を図りたい。平成24年1月ぐらいに区役所のほうに一本化をしたい。

参与 地域域防災とコミュニティで、地域防災にとってコミュニティはどのような場面で、どう必要なかの絞り込みができていないので、イメージができないと思う。例えば、防犯と地域コミュニティであれば、その地域の中で目が多いとか関係性が濃いところは、犯罪が少ないと非常にわかりいいが、防災とコミュニティというとき、発災時にどういうことを想定して、どういうときにコミュニティが役に立つのか。すべての人の安否確認がどれだけできるのかという話に絞り込まれていくような内容ではないか。コミュニティをやっていると、防災に役に立つのは何なのかをしっかりと絞り込まなければいけないと思う。

新潟のほうに救援に行ったとき、要援護者がどこにいるかという話ではなく、あそこ

のおばあちゃんはどここの部屋に寝ているから助けに行くと、そういうコミュニティがあるからこそ役に立ったことがある。でも、神戸に行ったときは、避難所が足りなくて、地域の人たちが分散してしまった。そういうときにコミュニティは何の役に立つのか。想定がされていないのではないかと、防災のときのコミュニティが何に役に立つのか議論をもう少しするべきではないかと思ったので、一言申し上げておきたい。

参与 非常に突っ込んだ議論がされたと思う。今回、事前に企画運営会議で議論された上での会議ということもあると思うが、今まで以上に非常に中身のあるやりとりだった。今月末から12月定例会が始まるので、きょうの意見も参考にさせていただければと思う。

コミュニティの強化ということ言えば、町内会、自治会の活性化が一番重要になってくるとは思うが、余りに今、会長を初め役員の方に過重な負担がいつていると感じている。ここを何らかの形で解決していかないと、今まで以上に町内会、自治会の強化といっても、絵にかいたもちになってしまう。行政としても、今までの枠組みを越えて、そこに立ち入って支援する仕組みを考えていかなければいけないと思っているので、次回以降ご議論いただければと思う。

### 3 閉会